

すぎなみ産

vol.8

2024

令和6年10月発行



NHKに長く愛用されてきた
プロ向けマイクは杉並発！

宇宙空間に飛び立っていく
人工衛星

プロミュージシャンが信頼を寄せる
真空管ギターアンプ

杉並で見つける
お気に入りの飲食店

すぎなみの味めぐり

杉並区

放送局向けマイクを製造し、内外で技術力を高く評価される「三研マイクロホン株式会社」

歴史的な瞬間に発せられたリアルな音を世界中に届ける!

スマートフォンにも使用されているマイクは、もはや存在しているのが当たり前のものとなっている。

その正式名称はマイクロフォン、もしくはマイクロホンで、「micro(極めて小さい)」「phone(音)」を拾えるといった意味合いがあるようだ。

スマートフォンに内蔵されているように、音を電気信号に変換する電子部品を指すこともあるし、

カラオケでおなじみの音響機器もマイクと呼ばれている。

私たちが使用している一般向けのマイクも十分に高性能だが、

さらにハイレベルの性能を求められるのは、放送局で使用されているプロ向けの製品だ。

プロ向けマイクを製造するメーカーは世界的にも数少ないが、

そのうちの1社が杉並区に本拠を構える三研マイクロホン株式会社である。

手掛けている製品の性能は日本の放送局のみならず、海外からも高く評価され、

オリンピックをはじめとするスポーツ競技やイベント、事件・事故などの中継放送で、

臨場感あふれるリアルな音を視聴者や聴取者のもとへ届けている。



小型ラベリアマイクロホンの「COS-11Dシリーズ」は2020年度アカデミー科学工学賞を受賞し、盾が贈られた。



スケートリンクの氷中に埋め込み、スケートの刃が氷を滑る音を拾うマイク。



話し手の声を確実に届ける必要がある、記者会見や選挙の政見放送などでも三研マイクロホンのマイクは数多く使われている。



砲弾型と呼ばれるマイク、MCM-1。スピーチなどで使用されるもの。傷跡が歴史を感じさせる。



1964年の東京オリンピックの記念映画を撮影するためにも使用された。写真はマイクの使用に対して贈られた感謝状。



社内の展示室に並べられたマイクの数々。壁面のパネルは海外での展示会の際などに貼られたもの。



■企業情報

- 会社名: 三研マイクロホン株式会社
- 所在地: 167-0051 杉並区荻窪2-8-8
- 代表取締役社長: 竹内迪子
- 創業: 1925年
- 事業内容: マイクロホン専門メーカー
- TEL: 03-3392-6581
- <https://sanken-mic.com/>



「原音に限りなく忠実に」をコンセプトに 超高性能のプロ向けマイクを世に送り出し、 米国アカデミー科学工学賞も授与される

放送局はもとより、音楽の録音スタジオや劇場などで使用されているプロ向けのマイクには、リアルな音声を忠実に再現できる高性能が求められる。超小型化と高性能化を追求し続けている三研マイクロホン株式会社のマイクは、NHK（日本放送協会）をはじめとする国内の主要な放送局で使用されている。たとえば、ふとテレビのスイッチを入れて、その画面に映し出された人物の胸元にピンマイク（クリップ装着の小型マイク）が付けられていたとしたら、それが同社の製品である確率は極めて高い。それほどの評価と実績を得ているのだ。

最初の東京オリンピックでも、 三研マイクロホンの製品が活躍

少々過去に遡るが、今から四半世紀程前に当たる1998年に開催された長野オリンピック（冬季大会）でNHKがスケート競技の中継放送を行った際、密かに画期的な演出が行われていた。まるで現地で実際に観戦しているかのように、選手が氷を削りながらスケートリンクを滑走する音がテレビのスピーカーから流れてきたのだ。

その音を拾ったのは、スケートリンクに埋め込まれたマイクで、三研マイクロホンとNHKが共同開発したものだ。両者の付き合いは古く、1939年にNHKから依頼を受け、アナウンス用にスタンドマイクを開発したのがその発端。1964年に開催された最初の東京オリンピック（夏季大会）でも、場内拡声用に同社製の単一指向性ダイナミックマイクと、中継放送用にNHK技術研究所と共同開発した接話型ダイナミックマイクが使用された。



数々の歴史的な場面において、 鮮明な音声を拾って評価される

スポーツ競技にとどまらず、他の歴史的な場面でも三研マイクロホンの製品が活躍している。独特な形状が個性的な同社製の砲弾型マイクは、終戦直後の歴史的な場面でも使用された。

そして、その後継機種はラジオ局で重用されるようになり、国内放送業界における標準マイクの地位を獲得。1952年に国産初の棒状マイクとして開発され、それに改良を重ねて1956年に投入された製品も、記者会見のテレビ中継放送では欠かせない存在となった。

1970年11月に発生したショッキングな事件でも、三研マイクロホンの製品が貴重な音声を拾った。

後に三島由紀夫事件と呼ばれる騒動で、ヤジや怒号が飛び交う中で演説を続ける三島由紀夫の肉声を鮮明に収録したのが同社の製品だった。

こうした実績から三研マイクロホンの技術力に対する信頼は厚く、今日でも様々な製品がテレビ放送やラジオ放送の現場で幅広く使用されている。遠くの音を拾うために銃のような形状になっているガンマイクがその一例。特に襟元にさりげなく装着できる小型のピンマイク（ラベリアマイク）は、テレビ番組や劇場公演などにおいて必需品となっている。その高い性能と耐久性が海外でも評価され、2021年には米国アカデミー科学工学賞が授与されている。杉並発の製品は世界的な栄誉に輝いたのだ。

写真左の製品は小型の音楽用マイク（CU-55）で、高音質収録を実現してアコースティック楽器の生音を忠実に拾う。写真右が大発明となった超小型ピンマイク（ラベリアマイク）のCOS-11Dシリーズ。あまりにもマイク部分は小さく、コードの束にしか見えなほど。



働く本音を聞きました

日々、会社で働く方に直撃インタビュー。
働き方や仕事のやりがいなどを聞いてみました。



国内営業部長
中山高一さん（写真左）

営業部 統括部長（海外担当）
山田正彰さん（写真右）



——御社のマイクは世の中のいろんな節目などで使用されてきたと聞きました。

中山：そうですね。たとえば1964年の東京オリンピックや、1998年の長野オリンピックなどでも使われました。また、野球では長嶋茂雄さんが現役を引退される際の「わが巨人軍は永久に不滅です」という言葉を拾ったのも当社のマイクでしたね。あるいは古い時代ですと、戦後間もない東京裁判でも使用されました。

山田：ほかにも音楽の録音用マイクはレコード会社の音楽スタジオなどでも使っています。海外ではツール・ド・フランスで使われたり、F1のレースで使われたりもしています。

——私たちが聴いている音楽なども御社のマイクで録られているかもしれませんね。杉並区ではいかがでしょうか。

中山：たとえば、セシオン杉並にあるマイクに採用されたりもしました。天井から吊り下げられて、ステージの音を左右隅々まで拾えるようなマイクですね。

研究開発は地道な手作業も

——実にさまざまなマイクがありますが、どのように作っているのでしょうか。

山田：マイクの用途やオーダーに合わせて作っています。たとえばニュースで使うようなマイクは、音を拾う経路が1チャンネルでは、万が一切れた際に音が拾えなくなります。

大事な発言が放送されなくなってしまう大変なことです。そうならないためにもバックアップ用に2チャンネルを設けたりしますね。

中山：難しい仕様もあり、スペースシャトルが打ち上がる時の音を録るためのマイクなら、熱や風圧にも耐えられなければいけませんから、専門的で高度な研究や製造を行っています。その一方で、アナログなやり方もあります。たとえば、この社屋の庭先で、手作業でマイクの塗装をするなんてこともありますよ。

マーケット・インの発想でものづくり

——それらの研究開発の中で、三研マイクロホン“らしさ”とは何でしょうか。

中山：“原音追求”といいますか、自然の音を録音できるようにしています。また、うちのものづくりは、こちらが作りたいものを作る「プロダクト・アウト」じゃなくて、お客様の要望に合わせて作っていく「マーケット・イン」。ですから大量生産品ではないんです。

——少量ながら高品質のものを作っていると。

山田：洋服で言えば、オーダーメイドですよね。「特定の音だけを録りたい」という要望もあれば、「周囲の音もすべて録りたい」というものもある。そういう個々のシチュエーションに合わせたマイクを製造しています。

■三研マイクロホンの歩み

1925 (大正14) 年	竹内利平が品川区に「竹内工場」を開業	1983 (昭和58) 年	竹内時夫が2代目社長に就任
1941 (昭和16) 年	現在地の杉並区荻窪に本社工場を移転	1984 (昭和59) 年	欧米へ高級マイクロホンを展開
1946 (昭和21) 年	純国産ダイナミックマイクロホンを開発	1992 (平成 4) 年	輸出版売会社であるサンケン・オーディオシステムズ株式会社設立
1948 (昭和23) 年	合資会社三研を設立	1999 (平成11) 年	竹内迪子が3代目社長に就任
1954 (昭和29) 年	日本オーディオ協会設立に伴い入会	2009 (平成21) 年	日本放送協会とともに、第35回放送文化基金賞を受賞
1959 (昭和34) 年	三研マイクロホン株式会社に改組	2015 (平成27) 年	創立90周年
1964 (昭和39) 年	NHK技術研究所と共同開発のマイクが東京オリンピックで使用	2021 (令和 3) 年	COS-11Dシリーズが米国アカデミー科学工学賞を受賞

むやみに小型化すると拾える音の 高低幅が狭くなって性能が低下する―。 この難題を常識を打ち破る発想で解き明かす！

趣味が講じてマイク製作に挑み、 2025年に創立100年を迎える

三研マイクロホンが創業したのは社会の教科書にも出てきた世界恐慌(1929年)よりも前の1925(大正14)年で、2025年には100周年という大きな節目を迎える。創業者の竹内利平さんが品川区に開業した「竹内工場」がその前身で、1941年に杉並区荻窪に本社工場を移転し、終戦の翌年である1946年には純国産のダイナミックマイクロホンを開発した。その2年後には「三研」を社名に用いるようになるが、竹内利平さんの兄弟2人が参加して3人で営むようになったことが由来だと言われている。

「初代社長の竹内利平の本業は旋盤加工でしたが、オーディオが趣味で電気蓄音機を自作していましたし、タムラ製作所(当時は田村ラヂオ製作所)様とご縁があったことから、電気部品開発の技術を習得させてもらえました。そこで、当時の最先端分野だったムービングコイル型マイクロホンを自作したところ、その技術力を高く評価され、1937(昭和12)年にはNHKに納品しています」

こう説明するのは、1983年から二代目社長を務めた竹内時夫さんの妻で、現在の代表取締役社長である竹内廸子さんだ。時夫さんの代に三研マイクロホンの製品は海外にも販路を拡大させ、グローバルにもその存在が認知されるようになったが、残念ながら1999年に他界し、代わって廸子さんが指揮を取るようになった。

話は前後するが、初代社長時代のマイク開発は戦争の勃発によって一時中断。廸子さんはその後について語る。「戦前のマイク開発はあくまで初代社長の趣味の範疇で、本業は大手メーカーの下請け仕事でした。ところが、終戦後に工場を再開したところ、下請け仕事が入ってこなくなり、何らかの自社製品を開発しなければならなくなりました。いろいろと模索した結果、自分の趣味である音響の分野で2つの機器を手掛けることにしました。ただ、そのうちの1つでは競合会社が出てきたので、ライバルのいなかったダイナミック型マイクロホンに的を絞ったようです」



代表取締役社長の竹内廸子さん

NHKからその性能を高く評価され、 国産のプロ向けマイクで圧倒的シェア

やがてマイクにおいても競合他社の進出が相次いだものの、そのほとんどが手掛けているのは低レベルの製品で、三研マイクロホンが開発したプロ向けのダイナミック型を製造できる会社は限られていた。「プロ向けのダイナミック型には特殊なマグネットや振動膜、超細芯電線など、当時は入手難だった細かな部品が多数必要でした。こうした特殊な部品を少数ずつ調達しなければならなかったため、大手企業は採算面を考慮して本格参入しなかったのかもしれない」(廸子さん)

先に述べたように、早くも1946年には純国産のダイナミックマイクロホンの開発に成功し、1949年からNHKに直接納品することになった。言わば公共放送の“お墨付き”を得たことになり、放送局や映画の撮影所、レコード会社などにも販路が拡大し、純国産のプロ向けマイクでは圧倒的シェアを獲得したという。

そして、1964年の東京オリンピックで三研マイクロホンの製品は真価を発揮。以後もオリンピックの度にNHKとタッグを組んで特殊なマイクを共同開発することになった。

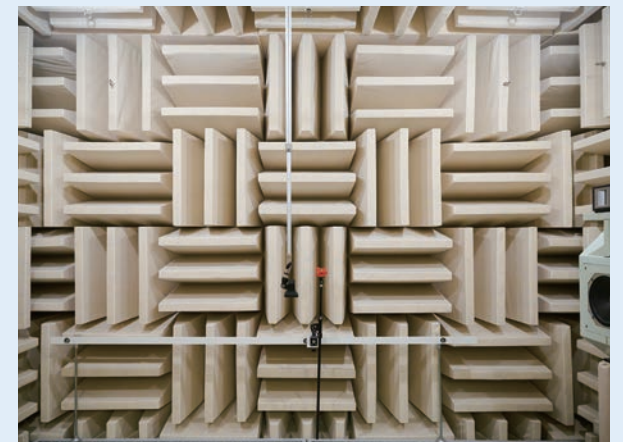
世界で初めて、振動膜と呼ばれる部品に極薄のチタン膜を用いるなど、その後も同社は斬新な発想で画期的なマイクを開発。ちなみにその製品(テーブル型マイク)は、ニュース番組でアナウンサーの脇にセッティングされていることが多く、これを読んでいるあなたも目にしたかもしれない。

今なお三研マイクロホンの本社は、杉並の閑静な住宅街の中にある。近隣の人々が知らないうちに、かの地で数々の世界的な製品が研究開発されてきたのだ。その中でも特筆すべきは、直径4ミリの超小型ピンマイクだろう。

今では様々なテレビ番組でお馴染みの存在となっているが、1990年に三研マイクロホンの世界最小サイズの製品を開発した際には、技術的に非常に高いハードルが立ちはだかっていた。従来の設計のままマイクを小型化すると、その分だけ振動膜の面積も減って、周波数特性の悪化(收音可能な音の高低範囲の縮小)を招いてしまうのだ。

「試行錯誤を繰り返し、当社の技術者たちは業界の常識を打ち破る発想でプロ仕様の性能を保ったまま、超小型化に成功しました。従来品のように振動膜を横方向ではなく、縦方向に配置することを思いついたのです」(廸子さん)

細部にこだわったことから開発に3年の歳月を要したが、



周囲から反射する音がなく、製品の收音性能を正確に測定できる無響室

小さくて目立たないうえに軽量で身動きにも負担がかからないことが評判になり、このマイクはミュージカル「ミス・サイゴン」1992年の日本公演初期に採用されたという。

現在も三研マイクロホンは杉並の住宅街で、次代を担う新たな製品の研究開発に挑んでいる。

写真右は、直径4ミリのピンマイク(COS-11シリーズ)の分解図。振動膜を横方向に設置してきた従来品の常識を打ち破り、プロ向けの高性能を維持したまま超小型化に成功し、テレビ局をはじめとする各所で愛用されている。



写真左は、一つのボディに2つの単指向性マイクをつけ、それぞれの角度を15〜180度まで自在に調整できる角度可変ワンポイントステレオマイク(CUW-180)。左右それぞれ、別の角度から発せられる音に狙いを定められる。

コラム この街この会社

三研マイクロホンの社屋は荻窪と高井戸の間。近くには歌人の与謝野鉄幹・晶子の邸宅跡がある。界隈には趣味人が多かったようで、広い部屋のある同社に集まって「夜通し、俳句の会が開かれていた」という話も社内には残る。文化的なものを好んだのは2代目社長の竹内時夫さんも同じ。若い頃は指揮者になりたかったという時夫さん。趣味はレコード収集だった。海外展開のためにイギリスに出張したときには、レコード会社との商談で「あの楽曲のここがいい」などと盛り上がった。あるいは杉並の文化的な土壌が、海外展開に一役買ったと想像するのも面白い。



杉並区立与謝野公園

ボーダーレスに物事が広がっていく現代、杉並から発せられた物が、海も、成層圏すらも越えています。世界のプロミュージシャンが認める音、地球の周りを巡る人工衛星、高度に専門的な知識の結晶であることはもちろん、それらを生み出すための大きなエネルギーも欠かせません。情熱的なものづくりを行う2社を紹介します。

SHINOS AMPLIFIER COMPANY

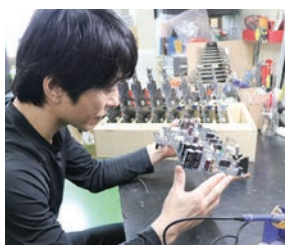
(しのーずあんぷりふぁいあかんぱにー)

真空管ギターアンプをハンドメイド
プロミュージシャンが信頼する技術と音と



篠原勝さん(左から2番目)、香奈さん(中央)と同社スタッフ。篠原さんは荻窪や新高円寺などに住み、現在も杉並区在住。

同じパーツ、同じ電気回路でも、計算どおりの同じ音は出ない。そのため実際に出てくる音を確認しながら細かな調整を行っている。



自宅でもライブでも活用できる「ROCKET」。小型ながら真空管を搭載し高性能。6色展開で海外の展示会でも目を引いたそう。



自作真空管ギターアンプの一号機。これはTRICERATOPSの和田唱さんからパーツを買い受けるなどして制作。ただし期待する音が出ず失敗に終わったのだそう。

「自分の耳を信じているんです」と篠原勝さん。20代前半に、楽器やミュージシャンをサポートするローディーとして、多くのコンサート現場を経験した。そのときに体に染み込んだ音が、現在手がけるオリジナルアンプの一つの基準だ。

転機はある現場での機材トラブル。「こんなとき直せる人がいれば」と言われたことで「直せるになりたい」と勉強を始める。腕を上げると「オリジナルアンプを作りたい」「アンプをミュージシャンに使ってほしい」と目標は上がった。

2006年に1人で会社を立ち上げ、アンプ作りを始めた篠原さん。以来「挫折と感動」を繰り返してきたという。初めて外注したキャビネット(スピーカーを収める筐体)は、希望に沿わないものが納品されてきた。「これなら自分でできるのでは」と当時、新高円寺にあった工房に木工機械を入れた。今や電気回路や木工の組み立てなどすべてを自社で手掛ける。

2017年には世界最大級の楽器展示会「The NAMM Show」に初めて商品を置いた。翌2018年はメーカーとして出展。しかし



配線もすべて徹底した手作業。アンプ1台1台が社内で製造されている。

- 社名: 有限会社SHINOS AMPLIFIER COMPANY
- 所在地: 〒168-0082 杉並区久我山1-7-41 岩崎通信機株式会社11号棟1階
- 代表取締役: 篠原勝
- 設立: 2006年
- 事業内容: ギターアンプ等の製造・販売
- https://shinosamp.com/



株式会社たすく (かぶしきがいしゃ たすく)

人工衛星や月面探査車などを開発・設計
宇宙産業の活性化に臨む宇宙ベンチャー企業



杉並区内の小学校に通い、現在も杉並区に住んでいる古友大輔さん。



設計・開発した小型の人工衛星。写真は評価実験用のもので、金属の枠組みだけが本物。

宇宙産業が広がり、民間企業の参入が増えている。阿佐谷南に住所を置く株式会社たすくも、そんな宇宙ベンチャー企業の1つだ。企業等へ技術供給を行うエンジニアリングサービスプロバイダー(ESP)として宇宙ステーションに載せる機器などの開発・設計に携わる。メンバーは約20人。『『小さい頃に天体望遠鏡から覗いた宇宙がきれいで、宇宙に関わる仕事を目指した』というメンバーが多い』と話するのは代表の古友大輔さん。自身は自動車メーカーの開発部門からキャリアをスタートさせ、宇宙ステーションに携わる会社へと転職。現在へとつながるノウハウや人間関係を築いていった。

一口に宇宙産業と言っても、最先端テクノロジーを詰め込んだものもあれば、そうでないものもある。「スペシャルな1個を作る技術と、同じ品質のものを多く作る技術は、ものづくりに使う「筋肉」が違うんです」と古友さん。

そこで同社は量産を見据えた開発にも取り組んでいる。まず設計を行い、次は部品工場などに製造・加工を依頼。できあ



社内で組み立て、動作を確認した後、さらに連携する航空宇宙研究機関などで試験を行う(写真は月面探査車(ローバー))。

- 社名: 株式会社たすく
- 所在地: 〒166-0004 杉並区阿佐谷南1-18-6-503
- 代表取締役: 古友大輔
- 設立: 2020年
- 事業内容: 各種精密金属部品の加工・製造
- https://task-inc.tech/



がった100点超の部品の組み立てを高校生アルバイトが手伝うこともあるそうだ。それができるのも同社が、誰が組み立てても同じように仕上げられる設計にしているため。「設計としては難しいんですよ」と古友さんは笑う。

宇宙空間は空気がなかったり、重力を感じなかったり、放射線量が多かったりするなど、地球とは環境が大きく異なる。けれども、その環境に合わせて一生懸命考えるという点では、宇宙のものづくりも地球のものづくりも同じだという同社。また、理系でないと宇宙産業では働けないということはまったくないと話す。今でこそ特殊にも見える宇宙産業だが、いずれは特殊ではなくなるに違いない。古友さんは言う。「もう手を伸ばしたら届くところに宇宙はあるんですよ」

すきなみの 味めぐり

新店舗も老舗も、どこか個性派ぞろいの杉並区。
まわりの人たちと楽しんだり、一人でリラックスしたり。
お気に入りの味わりを見つけに街を
歩いてみてはいかがでしょうか。



ぎゅうにゅうや

牛乳屋さんのソフトクリーム



ソフトクリームマシンも、アイスクリーム・ジェラートの本場であるイタリア製の最高級機。他社のマシンでは実現が難しいノンホモ牛乳のソフトクリームを実現し、独特のなめらかさで仕上がる。レギュラーコーンとカップが480円、ワッフルコーンが520円、持ち帰り用のアイスマイルクが420円など。ナッツや白玉（どちらも70円）、チョコレートソース（50円）などのトッピングメニューも。また、ピン牛乳（各種130円）をはじめとするドリンクメニューも用意。店内には、腰掛けて飲食できるスペースもある。

牛乳のプロのこだわりが詰まった別格の味わい

店名の通り、牛乳販売店が作る“超こだわり”のソフトクリームを味わえる。1940年創業の宮野乳業3代目店主である宮野雄一朗さんが店舗の一角を改装し、2019年3月にオープンした。原料に用いるのは、ノンホモ・パスチャライズと呼ばれる特別な牛乳。ノンホモとは、牛乳に圧力をかけて脂肪球を均質化（粉碎）する処理を施していないことを意味し、生乳に近い美味しさを味わえ、ゆっくりと消化吸収されるのでお腹にも優しい。パスチャライズとは、低温・短時間加熱で生乳に極力ダメージを与えない殺菌方法のことだ。ノンホモ・パスチャライズ牛乳は、健康な牛から搾乳され、なおかつ生菌数が少ない良質な生乳からしか作れないという希少なものの「牛乳のプロだからこそ、搾りたての生乳に近い素材で作りたい」という宮野さんのこだわりが詰まったソフトクリームは、一口食べれば「これは違う。別格！」と納得の味だ。

- 所在地: 〒166-0004
杉並区阿佐谷南3-10-3
- 営業時間: 11:00～18:00
(土・日・祝日は11:00～18:30)
- 定休日: 不定休
(ホームページ上で告知)



しょうぼう コクテイル書房



本のある空間でコミュニティや飲食を楽しむ

高円寺駅からセントラルロードを5分ほど進むと書店が並ぶ一角がある。飲食と古書を扱う「コクテイル書房」、そして「本の長屋」。「本店・本屋の実験室」。これらは神保町の古書店に勤めていた狩野俊さんが1997年にコクテイル書房を開業したことに始まる（現在は奥様が店主）。後に杉並区へ移転。2023年にクラウドファンディングにより本の長屋を奥様が、2024年には元理容店を自分たちで改装して狩野さんが本店・本屋の実験室を開く。これら2店はシェア型書店で、書棚を複数の区画に分け、それぞれを貸し出している。借りた人は「棚主」となり、思い思いの本などを並べて自由に値付けをして販売できる。狩野さんは「棚主さんのモチベーションは『本屋になってみたい』『少しでも売りたい』『本のある空間に関わってみたい』など、さまざまです」と話す。「本には希望があると思っています。それに触れるためにも足を運んでもらえれば」と狩野さんは希望を込めた。

コクテイル書房ではカレーや、コーヒーなどのドリンク、アルコールも提供している。文学的空間で飲食メニューを楽しめる。コクテイル書房、本の長屋、本店・本屋の実験室を、それぞれ見て回ってみるのもいい。狩野さんは高円寺在住。「僕の高円寺の印象は『風通しのいい街』です」。

- 所在地: 〒166-0002
杉並区高円寺北3-8-13
- TEL: 03-3310-8130
- 営業時間: 18:00～21:00
土・日曜日は夜営業（18:00～23:00）
- 定休日: 月・火曜日



創業スタートアップ助成でサポート！

杉並区では「創業スタートアップ助成事業」を行い、スタートアップの中小企業を支援しています。この助成事業は事業者を支え、区内産業の促進を目的とするもの。活用した多くの事業者が魅力ある事業を創り出しています。



詳しくはホームページをご覧ください↑

げつようび



日本人とも相性抜群のスリランカカレー

インドのそれと比べれば、まだスリランカのカレーは知る人ぞ知るという存在かも!? だが、肉だけでなく魚や野菜までレパートリーが多彩で、オイルも控えめでヘルシーな仕上がりであるうえ、^{かつおし}鰹節のように馴染み深い食材も用いていることから、日本人にも好まれやすいカレーだ。2017年に初めてスリランカを訪問した店主の児島麻里子さんは、その独特な美味しさにすっかり魅了された。そして、再びスリランカに赴き、現地に住む知人の仲介で有名ホテルのシェフや一般家庭のお母さんから作り方を伝授してもらった。そして、他店を週に1日だけ間借りし、「月曜スリランカカレー」を開業。当時の営業形態が今の店名の由来で、現在の場所で正式にオープンしたのは2023年4月のことだ。週3回（火・金・土）の夜間営業時間帯には、スパイス料理をつまみにお酒も楽しめる。

- 所在地: 〒168-0082 杉並区久我山2-13-6
- TEL: 090-8288-1662
- 営業時間: 日・月曜日（11:00～15:00）
火・金・土曜日（11:00～15:00、18:00～21:00）
- 定休日: 水・木曜日（変更となる場合はInstagramで告知）



しらかわてう ちゅうが

白河手打ち中華 アサガキタ



早朝から仕込む中太の縮れ手打ち麺に醤油ベースのスープがからむ。スープを取った後の「鶏ガラ」のサービスも人気（なくなり次第終了）。店名は、住所である阿佐谷北から商売には縁起のよくない「谷」を抜きつつ、ラーメンの原料となる鶏は朝が来ると鳴くことも掛けたネーミング。小山さんにとって阿佐ヶ谷は会社員時代から住み、馴染みのある場所。写真のメニューは「中華三昧」。

東京で稀有な白河ラーメン。会社員から修行を経て開業

JR阿佐ヶ谷駅から徒歩3分。白河ラーメン発祥の福島県白河市は店主の小山泰幸さんの出身地。以前は東京で広報の仕事をしていた小山さん。「証券取引所へ上場を果たすまで、サラリーマンはやめないと決めていました」。言葉どおり、勤めていた会社は上場を果たした。その後、退職。白河ラーメンの店「やたべ」で修業し、アサガキタを開いたのは47歳、2023年のことだ。収支予想を綿密に立て、初期費用は自己資金で賄いつつ、杉並区の「創業スタートアップ助成事業」も活用。一方、会社員時代に得たノウハウもありながら、自分からPR会社を頼ろうとはしなかったそう。店のSNSでは、あえて他店の料理を紹介する。「自分で『こだわっている』とか出すが嫌なんですよね。それは当たり前のことなので」。周囲の飲食店にも足しげく通う小山さん。「どこを歩いていても声をかけてもらえますよ」と街の良さを小山さんは話した。ファンは着実に増えている。



- 所在地: 〒166-0001
杉並区阿佐谷北2-11-1
- 営業時間: 11:00～14:30
- 定休日: 水曜日

すぎなみ産 発刊にあたって

杉並の仕事は面白い！

約20,000の事業所と、その仕事。

「すぎなみ産」は、杉並区に産まれた仕事を集めました。

自然と生活が混じり合う、暮らしやすいこの街に、

多種多様な産業は結びついています。

面白がってて、面白い。

好きなことを楽しんでやって産まれた身近な物事。

杉並発の産業は、こんな顔立ちでした。

杉並の仕事は面白い！



杉並区産業振興センター

〒167-0043 杉並区上荻1-2-1 Daiwa荻窪タワー2F
TEL.03-5347-9077(就労・経営支援係)

杉並区内産業のさらなる発展を図るため、区内産業団体(東京商工会議所杉並支部、杉並区商店街連合会、杉並産業協会)と同じフロアに設置した区の産業振興部門です。それぞれの団体と連携しながら、商店街や中小企業の支援、観光・アニメ事業の推進、都市農業の振興など、区内産業の活性化に向けた取り組みを行っています。

■主な取扱業務

中小企業資金の融資あっせん
創業・経営相談
就労支援、中小企業支援、勤労者支援
商店街の各種支援事業
観光事業の推進、アニメの振興
特定商業施設に関する届出
都市農業の振興、区民農園の管理



杉並産業協会

〒167-0043 杉並区上荻1-2-1 Daiwa荻窪タワー2F
TEL.03-3220-1231

杉並区内の法人および個人を中心とした事業主で組織運営されている唯一の産業団体です。労働保険事務組合として労働保険の取り扱いも行っています。会員企業には労働保険事務組合への加入の他にも従業員福利厚生のための健康診断、レクリエーションの企画や事業主の皆様には優良工場見学、講演会、賀詞交歓会等の開催などを行っています。

■主な取扱業務

関係官庁に対する届出書類の記入代行・指導
労働保険事務組合の運営
講演会・交流会の開催
団体への表彰者の推薦
会員企業に勤める従業員の方への福利厚生事業
会報の発行
会員間の親睦事業

すぎなみ産 vol.8 令和6年10月発行

編集・発行:杉並区産業振興センター

〒167-0043 杉並区上荻1-2-1 Daiwa荻窪タワー2F
TEL.03-5347-9077

登録印刷番号
06-0062

制作:杉並産業協会

クリエイティブ・ディレクター/アート・ディレクター:岸部浩三

ライター:大西洋平

ライター・エディター:三坂輝

カメラマン:豊田佳弘(表紙・p1~6)